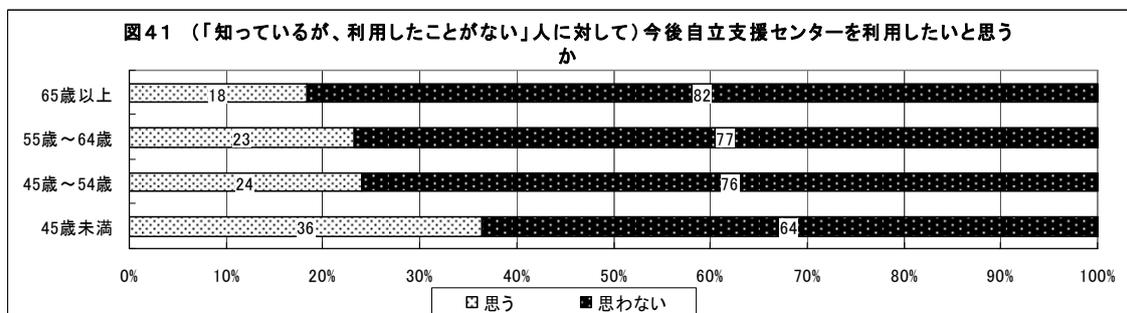
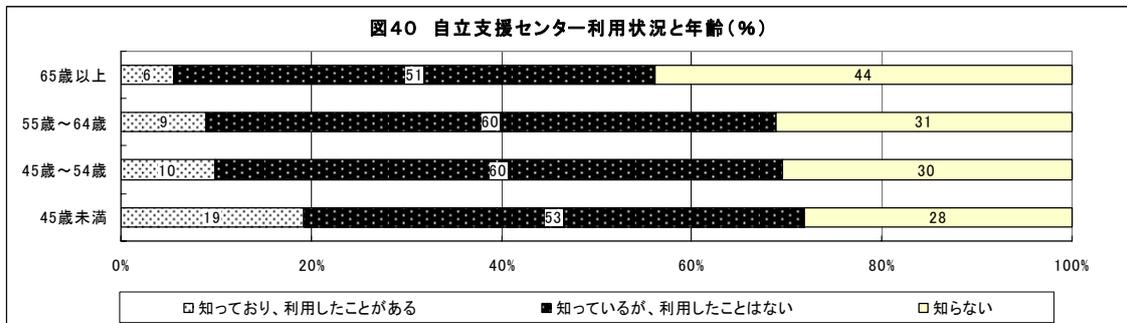


用経験者が多い。なお、知らないという人の比率が、センターを設置していないところが多い「その他」で45%になっているだけでなく、設置している川崎(40%)、東京(32%)でも3割から4割いることは留意すべきであろう。(巻末クロス表参照)



入所を希望しない人(885人)に、その理由を自由記述の形式で回答してもらった結果が(表24)である。これを見ると、一番多い理由は「集団生活(人間関係)が嫌である、不安である」(163人)、次いで「(高齢などの理由により)どうせ仕事がない」(141人)、「今住んでいる場所や仕事なくなる」(111人)、「悪い噂を聞いた(自由がない、規則が厳しい、住環境が劣悪等)」(89人)である。

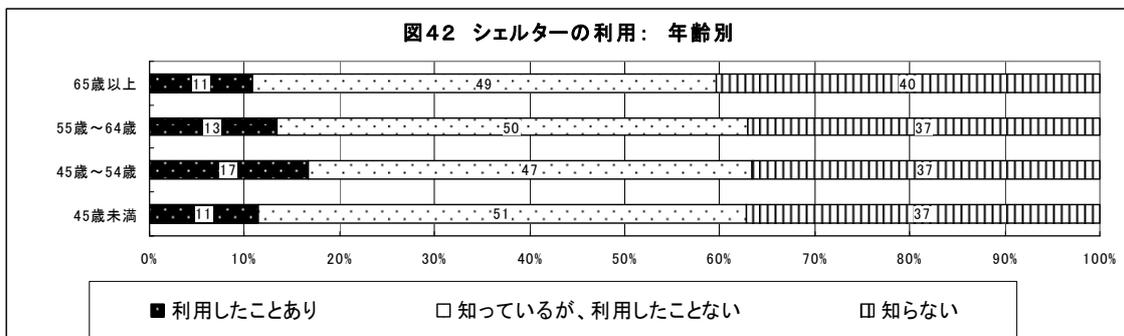
表23 自立支援センターの利用希望状況
 (「知っているが、利用したことはない」と答えた人)

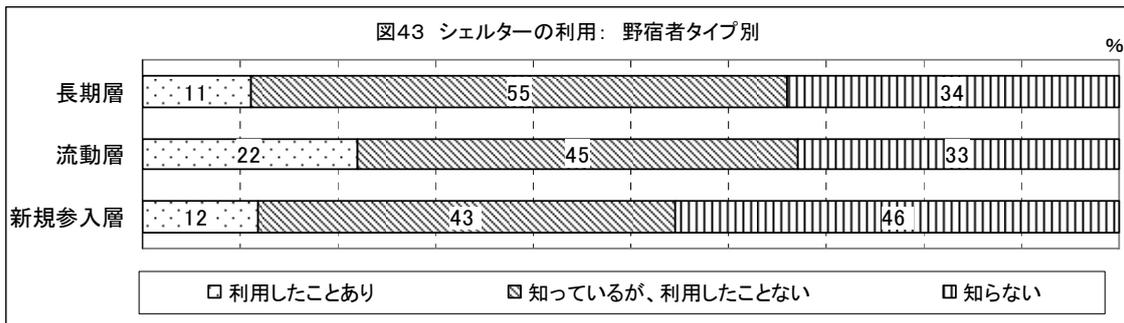
	人数	有効%
今後利用したいと思う	267	23.2
今後利用したいと思わない	885	76.8
思わない理由:		
集団生活(人間関係)が嫌、不安	163	18.4
悪い噂(自由がない、規則、環境等)	89	10.1
期間が短いので意味ない	28	3.2
今住んでいる場所や仕事なくなる	111	12.5
動物(犬猫等)がいるから	25	2.8
酒が飲めない	14	1.6
行政の世話になりたくない	45	5.1
近くの地域にセンターがない	6	0.7
(高齢などの理由により)どうせ仕事がない	141	15.9
その他	97	11.0
無回答	166	18.8
有効回答数	1,152	100.0
無回答	6	
非該当	889	
合計	2,047	

【シェルターの利用経験・希望】

シェルターの利用経験者、利用希望者は、年齢による差異はほとんどない。

野宿経験タイプで見ると、自立支援センター同様、流動層で利用も周知度も高い。また長期層の場合も、自立支援センターよりは利用されている。また地域別で見ると、東京、大阪、名古屋で利用が多い。(巻末クロス表参照)





6. まとめ

以上の分析から、今後のホームレス対策において基本的に留意すべき点を、まとめとして述べておきたい。

【3つの野宿経験タイプ（長期層、流動層、新規参入層）】

今回調査で把握されたホームレスは、ホームレス拡大のいわば頂点にあったとも考えられる前回調査時点と異なって、新たにホームレスとなる新規参入層が減少し、長期路上へ滞留する長期層及び屋根のある場所と路上を行き来する流動層を中心に構成されており、その意味でホームレス問題の局面が大きく変わってきたことが確認された。

だが、概数調査の結果によると、地域によってはホームレス数が増えているところもあり、新たに路上へ参入する人々も存在している。長期層、流動層、新規参入層の特徴を、それぞれ区別しながら、きめ細かく問題を把握していくことが重要である。これに応じて、対策も当然多様なメニューを含む必要があるだろう。

また、これらの3つの野宿経験タイプの構成割合については、若干の地域差が存在し、概数調査におけるホームレス生活場所の構成割合の変化から野宿する場所が「公園」から「河川」「その他施設」へ分散している傾向もみてとれる。このような地域差や生活場所の変化も踏まえ、ホームレス対策の検討をする必要があるのではないかと。

【支援制度利用の問題点】

支援制度の利用状況からホームレスを3つに区分すると以下ようになる。

- ・ 全く制度を利用していない人、
- ・ 相談その他支援レベルの利用に留まる人、
- ・ シェルターやセンターを利用したのち「再路上化」した人、

これら3つの区分から支援制度の問題点として、次の3つの課題を投げかけていると思われる。

第一は、全く制度を利用していない人が、長期層や「ずっと路上」にいる人々に多く存在しているが、なぜ制度に繋がらないか、ということである。この点と関わって、シェルターや自立支援センターの存在すら知らない人々が、センターを設置している地域も含めてかなり存在していることや、自立支援センターを知っていながら、その4分の3は入所していないことに留意すべきであろう。

第二は、相談その他支援レベルの利用をしながらも、路上での生活継続（都市雑業）を現実的な選択肢としている人々が最も多かった。第一の区分も含めて、こうした人々は一般生活への「不適應」と見なされがちであるが、「不適應」というよりはホームレスの人々の現実的な選択の結果であるともいえよう。したがって、これらの人々への現実性のある支援策は何かということが再度検討される必要がある。また、一部の路上生活者の中には、センターなど自立支援制度利用が病気や健康不安と結びついて理解されており、積極的に

就労自立をする道筋として理解されていないことをどう考えたらよいかという課題もある。

第三に、制度を利用しながら「再路上化」した人々は、制度利用にも、就職活動にも、他のホームレスより活発でありながら、「再路上化」している。その原因や解決策を明らかにして行くには、この調査のほか、シェルターやセンターの全体的な評価を待たなければならない。ただ、今回調査結果では、センター利用者は生活保護の経験も相対的に多く、そのきっかけの多くは入院や健康問題があったことが明らかになっている。これらを含めた多面的な分析が今後必要となろう。

【ホームレスの希望する援助】

ホームレスが就職するために望む支援については、年齢、野宿経験などの差を超えて、「アパートによる住所設定」への支援、次いで身元保証、また仕事先の開拓が期待されている。これはスキルの獲得や情報の提供などを中心とする自立支援策に比べて、ホームレスの人々にとっては、より現実的支援の希望であり、市民としての信用や安定を取り戻す支援の要請ともいえる。

なお、今後望んでいる生活の自由記入の中に、年金受給で暮らしていきたいとの希望もあり、加入歴の状況を見ると、それも一つの選択肢として可能であるともいえる。むろん、この前提として住所設定は不可欠のものとなろう。

いずれにせよ、従来のような自立支援に加え、それぞれの地域の多様なホームレスの構成やホームレス生活の現実を反映した、多様なメニューの可能性を検討していくことが、効果ある支援に結びついていくのではなかろうか。